

## 法然上人立教南宗への一考

木村 康 雄

法然上人は幼にして円満なる家庭の慈愛のもとに養はれ健全なる児童として育つた。そこには何の悩みもなかつたろう。しかし九才の時夜襲に伴い父君の惨死となりこれ一大打撃に相違はなかつた。而も父君の遺言は敵も味方も共に生きるを求めしむるものであり、人間愛にらしめ求道者たらしむることに熱烈なるものがあり、この真剣な求道と万人共生の精神が念仏往生の信仰ともなり、立教南宗ともなつた事は見逃す事は出来ぬ。上人の立教南宗にあつては色々の問題がからんでいる。一つは上人の内的へ精神的へ方面、当時代の背景及び仏教の動向等も上人をして立教南宗という一大英断ともなつたのである。上人出家以来種と碩学を厂訪され悩みの人となられた事は種々の書物に書かれている。

源空聖人私日記・法然上人伝才一下九巻伝等にそれそれ。上人頃出離道寢食不安とある。この短文の中にも上人の内心が明々白々と現れている。それには我根と時代という争にもなる我國における平安朝の仏教は貴族仏教の冠詞によつても知る如く、当時天台・真言の両宗は京都の旧仏教を圧して朝廷貴族面に信仰されもてはやされた。而もそれは祈禱仏教の名を以て呼ばれ祈禱本意に流れていた。現世祈禱にのみ重きを置いた仏教はいつまでも現在の供衆幸福のみが續くものでない争が自覺されてくるに従ひそれはやがて未来信仰に變つて行かぬばならぬ

かつたのは当然であろう。しかも世の中は泰平でなく榮枯盛衰の激しい世の中であり、生者必  
滅会者定離の世の中であり、そこへ地変が引きつづき人々を恐怖させ一層人心をつかれさせた  
。かゝる所に何かがよいものにすぎり、そして常住安樂の世界に行きたいとの考へがおこり、  
かくて平安朝の靈族的仏教は人々の精神を支配する事が出来ず、厭世隱遁の眾生じ未だ欣求の宗  
教的欲望は非常なる力で現れて来た。この思想は当時の文学によりても明らかに知られる。鎌  
倉以前の日本仏教は皆智慧で悟りを開いて仏となる自力聖道の教でもあり、それは三学を具す  
る事である。これでは一般に出来得る事はむずかしく特に今述べた如く人の心は常に不安に襲  
れていた時代であるから修行はおろか少しも行おうはずはなくみな罪人でありどうして救はれよ  
うと上人はこの様に日夜告しまれた。一期物語、選振集秘鈔、浄土圖間記等に浄土宗を立つる  
意は凡夫往生の爲なりとある。総ての人々がもろともに救はれる道でなければならずとの時  
ひたすら念仏により浄土を欣求するこの法は時代思潮にふさわしく適合した教法でもあり浄土  
宗に適合していたともいへよう。

凡仏教雖多所詮不過戒定慧之三学……然我此身於戒行不持一戒於禪定一不得之於智慧不得斷  
惑證果之正智……悲哉悲哉爲何爲何。爰如予者已非戒定慧三学之輩此三学外有相心我心之法  
門耶有堪能此身之修行耶。求万人之智者訪一切之学者無教之人無示之倫然固歎歎入經藏悲悲向  
聖手自授之見之善哉和尚觀經疏云一心惠念弥陀名号……嗚彼仏及故文見得之後如我弄無智之  
身偏仰此文事憑此理。修念念不捨之稱名備決定往生之業因……其後又披慧心先德往生要集又  
云往生之業念仏爲本又見慧心妙行業記之文云往生之業念仏爲先……然則真空隨大愿善導和尚  
之教往生本朝垂心先德之教稱名念仏之勤長曰六万回也……徹選振集卷上(淨全九五)和語灯録

卷五（浄全六〇七）初伝才六等之に依つて見るに大唐善導に帰依すると同時に彼の僧都一代の化風に待し常に自分の先德として敬われたのである。上人は先ず善導の觀經疏を披覽して亦陀本願の素意を悟り後、慧心の往生要集及び妙業行記の文を披見して以て專修念仏に歸せられた様である。

法然上人が余行を捨てて一向に念仏に歸せられた事については、諸伝の記述に互に異同があるが、法然上人伝殘缺二卷伝卷下（浄全九三）上人諸宗のむねをさぐり見給に諸教所讀多在亦陀の妙偈をえてより、此世の凡夫生死をはなれる教たゞ浄土の専門にしかずとおもひさごめて高倉院御在位元年御年卅十三……とあり是れは即諸教所讀多在亦陀の妙偈により以て念仏に歸すという説である。源空聖人私日記に、初始自曇鸞道綽台導懷感御依至于楞嚴先德往生要集雖窺與旨二返返拜見之時者往生猶不易才三返之時乱想之凡夫不如称名之一偈……これは広く浄土の章疏を見て称名の一行は未代衆の出離の要道である事を悟られたという。十六門記亦ハに京師善導和尚鈔化の八帖の聖書（上人在世般舟證末流布政云ハ帖書）を拜見するに、未代起意の凡夫出離生死の旨を定判し給へり……隨喜身に余り身毛為豎てとりわき見こと三迦前合せて八座たり時に觀至敬台義の一心專念亦陀名号の文に至て台導の元意を得たり歎喜の余り聞くはかりしかども。予が如の下代の行法は阿弥陀仏の法藏因位の旨、かゝて定置るるをやと高聲に唱て惑覺隨に徹り落涙千行なりき……十六門記には往生要集の事はいつていない。決誓披手印疑阿鈔卷上にも以上の事が記述してある。又變状伝弘決疑鈔亦二（浄全二一七頁）亦五（浄全三、二八頁）十六門記の如く慧心先德の勸をいつていないのは徹疑状集に異るが皆一心專念の文によりて以て浄土門を叩くとするは互に同じである。變状密要亦五に……

故雖爲我朝先德惡心往生要集念仏行儀番細明之……往生要集の事は記述してあるが一文はし  
ていない。選沢集秘鈔才一 抑々惡心先德依往生要集謂夫往生極樂之教行出世末代目足也……  
拾遺百德伝才三十卷伝才三にもや、同じく記せられぬ。藏土攷求浄土が記されてある。浄土法  
門源流章に吾源信僧都依往生要集……乃以台尊和尚爲所依京師といへり。之を以上述べし記  
述に依ると先ず往生要集を被見し其の指南に従つて台尊の派を求められ之を被覽して以て一向  
專修に入られた事の豫である。九卷伝才一にも出離の道にわすらひて身心やすからず。報恩藏  
をひらきて出離生死のため。衆生清度の爲に一切至をひらき見給ふ事五箇なり……然るに惡  
心の往生要集を南見給ふに台尊の疏には乱想の凡天孫名の行によりて順次浄土に生べき旨を判  
じて凡夫の出離をたやすくす、められたり。とりわけひらきみんと思ひて別して見る事三箇前  
後合て八箇。或詞に一心專念弥陀名号。乃至順彼仏饒故の文にいたりて忽に本願の正意称名に  
あり……勅伝才三これに同じである。以上の事を合せて考へて見るに、もし僧都の指南なけ  
れば或は当時浄土衆の萌泉は見られなかつたかも知れない。

往生要集は日本に於ける浄土教の典籍として元祖以前に最も傑出し韓信されていたものであ  
る。上人青年時代より要集は幾十回読まれた事に相違ない。殊に叔空が円戒の正統でもあり又  
要集の学匠でもあつた。この往生要集を著した慧心虎源信僧都は日本仏教界の高僧であり、具  
著述學問德行乃至絵画彫刻等多方面に秀でておりその精神は物眞面より精神面へと即ち<sup>本</sup>聖世界  
を捨て阿彌陀仏の世界に生れ弥陀の教を受けて成仏せんとするのが其の根本信念であつた。平  
安時代に穢土厭離、攷求浄土の呼びは破天荒の呼びでありその呼びに應じて生れしが法然上人  
親鸞聖人一通上人等の諸師であり鎌倉時代の浄土教の源をひらき基礎を依れしはこれ惡心僧都

である。

時に叡山に行われたる常行三昧の念仏は叡山に於ける浄土思想の中心であつた。四種三昧の  
中常行三昧の念仏は弥陀に皈する念仏でありこれ天台における念仏の基であり浄土教の淵源を  
なすものである。しかし天台においてこの四種三昧を方便として摩訶止観の観法であるがこ  
に説かれる常行三昧の念仏も勿論観法の方便として天台に用いられそれは教義理論上とかれし  
念仏三昧であり修すべき念仏三昧であるがしかし冥寂の跡より見ると理論と異り即ち祖師達の  
念仏三昧の跡を見ても認められ、観法の方便としての念仏ではなくその冥浄土教に顯れた西方  
浄土往生を願ふ念仏と異らない。

恵心僧都は冥在を信するとか、仏は尤とか宇宙の大靈とか本体であるとか云う如き空漠なる  
信仰では安心立命は出来得ない是の如き絶対的超越的冥在を捉へているのは未だ信仰の熟せな  
い間であり恵心僧都も壯年の時まで或はこの様な考を育していたとも思はれる。前が冥の人生  
はこの様な空漠たる信念をもつて満足されるものではない。恵心僧都も往生要集製作の時既に  
に具体的の仏陀を確認し之を觀察の対象として無只の頂相より足下の千輻輪相に至るまで順逆  
反覆して之を主張されこれが往生要集の前謂正修念仏の説であり觀念の念仏である。要集に正  
しくは觀念觀察の念仏を勧められたが此の觀念觀察に堪へざるものの爲に亦口称念仏を勧めら  
れ、或は歸命想に依り或は引接想により或は往生想による可しと書かれている。往生要集の中  
には多くの聖論を引かれ又諸師の説も採用されている。

諸伝記に上人は一切至を五遍まで御覧になつたと記されている特に要集は数十遍以上も御覧  
になつたろう。善巫の如い上人が要集に対して畧科簡詮要善の末疏を依られた事を見てもい

に関心大であつたかがつかがわれる。しかし往生要集は大いに研究されたが併し此の書には満足出来ず、即ち其の中に引用されてあつた台導の親至の疏を披見され遂に疑問が解決されたのである。その模様を十六門記に「愚悦徹顛落疲于行なりき」とある上人の喜び于行を行の疲が止められなかつた事が拜察される。

法然上人は往生要集に導かれ台導の疏に歸し台導の疏に歸されたから往生要集を捨てて了はれた事ともなる。併し選択集には往生要集より取られた事が少くはない。開卷一にある往生之業念仏爲本の語は浄土教開宗の旗印である。この語は往生要集より引かれた。又上人が円頓戒の正統をつがれ戒律を護持せられ事極めて宏略であり、これも恵心僧都の感化をこうむられた事にもある。恵心僧都に至るまでの叡山の念仏はいわゆる理觀の念仏であり恵心僧都より法然上人に至るまでの念仏は所謂觀念の念仏であり法然上人以右の念仏は所謂口称念仏である。

開宗時にあたり本當の指導的人格が思想的判斷と決然たる實踐を示す必要がありこの思潮が上人を培いとして上人の立教開宗への導火線ともなつた事は重大なる事でありそれにもまして慧心虎泉信成かりせば浄土開宗が未開のままに終つたとも云へるのである。